



●5月から9月の間は朝の5時から圃場に出て実習を行います。
「4時起床なので、最初の頃はちゃんと起きられるか不安でしたが、今ではすっかり慣れました」



●ミニトマトの茎を支柱に固定する作業も手慣れた様子。5月下旬からはイチゴやキュウリなどの収穫も始まり、忙しい日々が続きます。



明日を語ろう！ 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●農業を未来へとつないでいく若い力
夢に向かい、実践的に農業を学ぶ。
自分たちが作ったものを通して
農業の魅力を伝えていきたい。

「札幌市」
学校法人八紘学園
北海道農業専門学校
関口杏さん
佐久間彩南さん



●関口杏さんは祖父の姿に憧れて農業の道を目指しました。理想とするのは少量多品目栽培。いつか自給自足の生活を実現したいと考えています。



●千葉県から進学した佐久間彩南さん。卒業後はジャガイモ関連の事業を展開する道内企業に就職し、生産農家のサポートをするのが目標です。



いつの間にか芽生えていた 農業を仕事にという思い

札幌市豊平区の一角に広がる、のどかな農村風景。都心部の近くにありながら63ヘクタールもの土地を有し、農業の実践教育を行っているのが学校法人八紘学園北海道農業専門学校です。

同校は職業実践専門課程認定校として、未来の農業の担い手を育成しています。家業の継承や新規就農、農業関連企業への就職などさまざまな目的を持つ学生たちが、農業の基礎的な知識から専門的な技術まで、2年間を通して体系的に学んでいきます。関口杏さんと佐久間彩南さんは、園芸グループ野菜科で学ぶ2年生。圃場での実習では声を掛け合いな

がら、手際よく作業を進めていました。俱知安町出身の関口さんが農業に関心を持つようになったのは小学生の頃でした。農業を営んでいた祖父が生き生きと働く姿を見て、自然に将来の仕事として考えるようになったそうです。その後、俱知安農業高等学校で農業の基本を学び、さらに知識と技術を深めたいと同校に進学しました。「実践的なカリキュラムが魅力でした。祖父が言っていた、広い世界を見聞きた方がい」という言葉にも背中を押されました」

ジャガイモについて学びたいと同校に進学しました。「ジャガイモはおいしいだけでなく、種類が多くて栄養も豊富。地域限定の商品もたくさん作られています。そんな魅力的なジャガイモを、自分でも作ってみたいと思いました」

学んでみて気づいた 農業の奥深さと難しさ

農業を幅広く学ぶうちに、あらためてその楽しさや奥深さに気づかされたという2人。「学んでいくうちに、次の課題ややってみないと分かりません。農業は完成形のない仕事。だから限界もないのだと知りました」と佐久間さんは言います。また、関口さんも「実習では自分で考

えて、いろいろと工夫をすることができず。肥料を調整することで収量が大きく変わるなど、結果が目に見えるのもやりにくくなっています」と農業を学ぶ意義を語ります。

一方で、失敗をしたり、農業経営の厳しさを学んだりもしました。例えば、カラフルな品種のジャガイモを作ろうとしたところ、管理がうまくいかず、種芋を腐らせてしまったことがあったそうです。また、好きなものだけを作っているのは経営が成り立たないという現実も知りました。天候などに左右され、思い通りにいかないことが多いのも農業の一面。失敗や試行錯誤を繰り返した経験が将来に生かされていきます。

理想とする農業を実現し 未来へと引き継ぐために

後継者不足に悩む農業において、若い担い手は心強い存在です。将来は2人とも農業に携わることを決めています。

関口さんは祖父の農地を引き継ぐことを目標にしています。「祖父が亡くなったため、現在は農業生産法人に農地を貸しています。本当は卒業したらすぐにでも地元に戻って農業を始めたいのですが、もう少し経験を積んだ方が良いでしょう」と、正直な気持ちを明かしてくれました。

佐久間さんは農産物の委託栽培から流通、販売、商品開発などを手掛ける法人への就職を希望しています。その理由の



●重たい肥料の袋を抱えて、使う量を正確に計ります。力を合わせて作業を行うことも大切な経験です。



●作業の手順を確認。肥料を与える量や散布する順番などもしっかりとチェックします。